

暗やみの応援歌

福留 悠斗

「腕ふってー。足上げてー。」

お母さんの声が背中に飛んでくる。ねむいのを起こされ、マラソンの練習だ。ほくがマラソン大会の目標に、十位以内に入ることがかけたからだ。

「目標ならだれでも書けるでしょ。それを達成する努力をしないと。お母さんも一緒に走るから。」

そういつて始まった早朝練習はねむいし、寒いしイヤになることが多かった。夕方がいいなあ、と言うと、

「お母さんは仕事あるから、やるなら登校前よ」

と言われてしまった。朝の六時はまだ暗いので、走っているのが車の運転手にもわかりやすいようにと、けい光色のタスキをかけて走る。ちよつとはずかしい。

ある日、お母さんが、

「今日はお母さん自転車でいいかなあ。」

と聞いてきた。

「えー。ほくは走ってくれた方がいいんだけどなあ。」

お母さんはちよつとだまってそのままいつものように走り出した。

一カ月も続けたころ、キツイし、タイムはのびないし、もうイヤでイヤで、

「やめる。」

と言った。

「そう……。ここまでできたのにやめるの？ お母さんだって

好きでやっているわけじゃないのよ。練習しなかったら、きつとやっておけば良かったところかいするからね。それより、苦しかったけど、やってよかったと思うほうがいいでしょ。」

いくらそう言われても、イヤでたまらなくなつてやめることにした。

それから三日後、学校で試走があった。思ったより早く走れた。そうか。あの早朝マラソンはむだではなかったのか。

ほくがまた走る、と言うと、お母さんは、目をキラキラかがやかせた。それからマラソン大会までの一週間、

「腕ふってー。足上げてー。」

は、ますます多くの力になった。

マラソン大会当日。お母さんは仕事で応援に来なかった。でも、ほくにはあのかげ声があった。

結果は八位。自分でも信じられないほどだった。お母さんありがとう。ほくは自分の事しか考えていなかったけど、お母さんは走る前に朝食の用意をして、走った後にはあはあ言いながら出かけるじゅんぴをしていったんだよね。自転車でもよかったのに。苦しかったけど、練習してよかったと感しやしています。

「腕ふってー。足上げてー。」

暗やみの応援歌が僕の背中をおしてくれた。